S-1

新村出とフィールド言語學

千田俊太郎

(1) a. チェンバレン先生は、朝鮮語の研究に於て先進者アストンを有したと同じく、アイヌ語の研究に於て、先驅者バチェラー翁を有した。またディクソン教授をも、このアイヌ研究がはに於て先行者とした。これらの諸先輩はみな均しく英國人であつたのは決して偶然ではなかつた。(新村 1935: 555)

b. 先人たちについて: 小倉 (1964)、土田 (2015)、金田一 (1935)、金城 (1948)

c. 日本における人類学の歴史は、近代日本の版図拡大と平行して展開し、太平洋戦争に敗北し海外植民地を失うまで、日本の人類学者は、新たに獲得した植民地や占領地において、次々と調査研究を実施してきた。(坂野 2005: 5)

d. 「我が帝國内の言語」(小倉 1920: 35–36): (1) 國語、(2) 朝鮮語、(3) アイヌ語、(4) 樺太内の言語、(5) 琉球語、(6) 臺灣内の言語、(7) 南洋諸島の言語

e. 學者も世人も久しく南方に關心をもたなかつたし、また小川先生の多年に亘る御經歴が雄辯にそれを證明する様にこの種の研究が權威筋から保護奬勵されなかつたばかりか、冷遇されてすらゐた。少くとも南方の學術研究に關する限り、日本はあまりにも、「帝國主義」的でなかつたと云ひうるであらう。(馬淵 1948)

表 1　The features of prototypical linguistic fieldwork (Hyman 2001: 21)

	Fieldwork prototype	Fieldwork countertype	Least fieldwork-like
Elicitee	Other	Self	Introspection
Elicitor	Self	Other	Secondary data
Distance	Far	Near	One's domicile
Setting	Small	Large	City, university
Duration	Long	Short	Brief stopover
Language	Exotic	Well-known	One's own
Subject matter	A Language in its natural/cultural context	Language in general as a formal system	Abstract syntax
Data	Naturalistic	Controlled	Synthetic speech
Motivation	Languages-driven	Theory-driven	

1　新村出

1.1　東京帝國大學時代

(2) a. 明治三十三年から私は上田教授の國語研究室の助手を勤め、一年後には囑託となつて同室に出入したのであつたがその以前から研究室には零細な方言資料が存し、又續々新聞雑誌上に散見する方言語彙などを蒐集整理する方針が授けられ、私たちの上にもその分擔が命ぜられた。... 明治三十三年の八月には研究室から八杉君と私とが飛騨の白川地方の方言調査に出張を命ぜられた。何しろ生れて初めての採集ではあり、世間知らずの私ではあつたりして、殆ど目に見えた功績は擧げられなかつた。... 白川流域の溪間は前後一週間ほどであつた、八杉君と方言らしいものを各々手帳につけとめ、又名高い高大な家屋の構造を見聞し、又家族の名稱を聞取りなどして、今もその手帳の一部がどこかに存しないではないが、後年見出して見返へしてゆくと、いやはや幼穉千萬で我ながら恥入つた始末である。(新村 1938)

b. 第三回の調査は、郷里の静岡以西、名古屋以東にわたる東海道及びその近接地方の言語、... 前後三回にしか過ぎぬ方言採集旅行のうち、この度のは非常に益する所があつた感がした。この時の報告書は、伊豆西海岸の方言調査報告書と共に、その頃の業績としては、多少の自信をもつたものだが、いづれも大正十二年研究室で災亡してしまつたのは遺憾である。(新村 1938)

(3) 私が大学へ入学した年は，明治二(ママ)十七年だった。... 新村出先生が言語学科を卒業されて，東大助教授，国文学科の国語学概説を御担当された年だった... 新村先生のあの国語学の名講義は，たった一年間，橋本君・小倉君・伊波君・金田一等へ講義されただけだったのである。(金田一 1969)

1.2　京都帝國大學赴任後

(4) a. わたくしは、一九〇七年から八年の一年半にわたり、ドイツに留学して Berlin, Leipzig で一般言語学を研究していました。八月のはじめ文部省から「Dresden に万国エスペラント大会があるから、日本を代表して出席せよ」との電報がきました。... 正直に申すと、わたくしは Brugmann, Leskien などの著書を読んでいましたので、エスペラントの可能については不可能とはいわぬが、sceptic でありました。それで、迷惑ではあるが、見学的にいってみようと決心しました。(新村 1972: 330)

b. RO 1922.2 は、正確な日時なしに、京大のエスペラント講習の終講式で新村がドレスデンでの世界大会の思い出を語り、熱心な支持者になったことを伝えていた。この前後に京大エスペラント会の会長に就いたのであろう。新村はこの年に結成される京都学生エスペラント連盟の会長にも推されることになる。... 新村は翌 1923 年から 1926 年まで日本エスペラント学会の評議員も務める。23 年 11 月 11 日の関西学生連合エスペラント雄弁大会では会長として開会の辞を述べ、「明瞭なるエス語で堂々と挨拶」したと伝えられる (RO 1924.1)。さらにのちの 1952 年 9 月には第 39 回日本エスペラント大会 (京都) で名誉会長に推され、開会式の挨拶でドレスデン大会の思い出を語る。(後藤 2016)

(5) 私が東大の言語学科に入ったのは大正 4 年で，私が 1 年に入った時には 2 年にも 3 年にも学生が 1 人もいないし，2 年になっても， 3 年になっても言語学科の新入学生が 1 人も無い有様，大正 4 年から 7 年まで東大では学生 1 人切り，京大はゼロ，まさに言語学科の暗黒時代であった。... [新村] 先生の著作目録を見れば，いかに著作に努力せられたが判り，私ごとき怠けものは恥しく穴に入りたい思がする。(浅井 1969)

1.3 昭和

(6) a. 1930 年、霧社事件、かつて淺井惠倫の通譯を務めた二人が割腹自殺 (土田 1984)

b. 1933 年、藤岡勝二、東京帝國大學退官（日本の國際聯盟脱退の年）

c. 1935 年、チェンバレン歿、藤岡勝二歿
同年、ドイツエスペラント協會 (GEA) が年次總會 (於ドレスデン) で新しい規約を採擇、協會の目的の一つとしてエスペラントを「國民社會主義的方向で利用すること」を規定。ついで「GEA の會員は同一のドイツ民族に屬するものに限る」と公表しユダヤ人を追放。(リンス 1975: 50–51)

d. 1936 年、新村出、京都帝國大學退官

e. 1937 年、上田萬年歿

f. 1938 年 2 月、「日本言語學會成立 全國の言語學者によつて發起された同會は二月二十七日 (日) 午後七時より學士會館に發起人會を開催。學會の開催、機關誌の發行等を決定し、新村出博士を會長に推戴することとなり成立した。」(『方言』8(2) 上田萬年博士追悼記念號竝終刊號、「學界消息」)

g. 1938 年 7 月、泉井久之助、南洋群島へ出張

h. 1939 年、サピア歿

i. 1942–1943 年、朝鮮語學會事件 (三ツ井 2010)

j. 1955 年、『広辞苑』初版

k. 1957 年、チョムスキー、Syntactic Structures

l. 1967 年、新村出歿

(7) a. ジュネーヴといへば、近年小林英夫氏によつて移植されたソッスュール學派の學説の普及しつゝあることを、我國の學徒に極東比較言語學と新國語學との智識を授けたチェンバレン先生の隱棲終焉の地としてのジュネーヴに結びつけて、先生が日本の未熟な學界を明治二十年代に指導された約半世紀以前の昔を回顧しながら、世運のすゝみに對してひたすら驚嘆せざるを得なかつたのであつた。(新村 1935: 553)

b. ... 南島より伊波普猷氏の如き研究家を出し、更に續々土着の新進學徒を輩出するに至つたのは、チェンバレン先生が啓發の功に由るものといはねばならぬ。... 金田一博士によつてユーカラが採訪され研鑽されたが如く、伊波氏によつてオモロが正録詳説され、南島語の方言や語原の研究がますます完成されんとするのを見るごとに、チェンバレン先生の偉業を景仰せざるを得ない。(新村 1935: 558)

c. 明治十二年から同二十七八年の頃まで、... 日本語が話せるといふことは、一つの外國語が話せると

いふ位、當時の親日派に取つての誇りであつたが、四十年後の今日では、琉球語を操るのが、むしろ恥辱と思はれる迄に世相が變り、どんな寒村僻地でも、標準日本語の通じない所がなく、琉球語の單語は國語のそれにすげかへられ、その音韻語法さては言廻しまで、國語的になつて了つた。(伊波 1935: 586)

d. 知里眞志保君は、アイヌ神謠集の著者知里幸惠女史の令弟で、... 室蘭中學から一擧一高へ入つて、三年間、英語や獨逸語では、さすが一高の秀才をも後へに瞠若たらしめて押通した。それなのに却つてアイヌ語の方は、實は家庭で話されないものだつたから、殆ど一語も知らなかつた。...
それが、どうであらう。暑中休暇で歸省する毎に、部落の人人の間へ割り込んで、大部分をその中に送るやうになり、一高を出る頃までには、驚くべき上達をし、更に大學へ進んでからは、ユーカラでも何でも解らないものが無い程勘能になり、殊にアイヌ文法には深い興味をもつて、私自身の組み立てたアイヌ文法を刻銘(ママ)に吟味し、大體その組織とその觀方で、私に代つてアイヌ語法の理想的な教科書を書き下ろしてくれた。(金田一 1936: i–ii)

e. 我國に行はれる日本語以外の言語の數も、考へて見れば、意外に多いものである。その中で種々な意味から比較的重要視せられ或は注意せられてゐるのは、朝鮮語をはじめとし、所謂臺灣語 (支那語の一つ)、臺灣の蕃語 (高砂族の言語、インドネシア語の一つ) それに北海道千島樺太のアイヌ語であらう。(泉井 1936)

(8) a. わが親縁の地にして山水明媚しかも詩興詩情ゆたかなる廣島において高等師範學校の英語學教授たる木坂千秋君が、多年推敲中なりしサピアの言語學の譯本を世に出さうとしてゐる。私の悦びは譬へやうもないと共に、回想の情が甚だ深い。(新村 1943: 1)

b. ... 私は在職中の晩季八年間ほどに亙つて、此の原本を入門書として言語學科の演習用に使ひ續けたことがある。昭和三年春以來同十一年に至る三回生諸君と共に此の本を講讀し、或は輪講を聽き或は評釋を試みたりした時の私の思出は、今益々なつかしさに堪へないばかりである。また此の一書は、私がわかい時に讀み味つたセイスやガベレンツやパウルやスキイト等の名著と共に、斯學に於ける私の五部親愛書の隨一ともなつてゐる。(新村 1943: 1)

(9) 私たちの学生であつた故木坂千秋君が、昭和十八年、あの若さで、あれだけの理解の下に、本書を訳出刊行したことについて、敬意と愛惜の念を禁ずることができない。同君は、私が、京大言語学科において、卒業後間もない講師であった時の優秀な学生であった。... 木坂君は昭和十八年夏、戦況次第に悲境に沈むころ、出征してフィリピンに渡り、ついに再び帰ることがなかった。私は不幸にも、優秀な学生を失った経験が比較的多い。(泉井 1957: vi)

(10) 昭和初期の京大言語学科では言語人類学が紹介されていたわけで、そのような環境から、泉井久之助 (1905-1983) や江実 (1904-1989) など、フィールド派の言語学者も登場してくることになる。(菊地 2011)

(11) Qunan-tuna 語についての研究は、ニューギニア滞留中に一応完成し、昭和 19 年 (1944)2 月 11 日紀元節の佳日に、剛 7591 部隊 (加藤雄三大佐) の本部から、ラバウル語 (ニューブリテン島土語) I 文法篇 II 会話篇として謄写印刷され、今村均大将隷下の各司令部、直轄実戦部隊にそれぞれ配布されたものである。

しかしながら「会話篇」の内容が、アメリカ、オーストラリアなど連合軍当局を刺激するおそれあると判断され、全部焼却されてしまった。このことについて筆者は今も残念に思っている。(石川 1971)

2　パプア諸語

2.1　パプア諸語研究の始まり

(12) a. According to S. H. Ray (1894), the first Papuan vocabulary was one made of Miriam (Torres Straits) in 1822; but this did not survive. (Laycock and Voorhoeve 1971: 510)

b. In 1828, Modera collected a wordlist in the Kamoro language on the south coast of West New Guinea (Voorhoeve 1975: 117; cf. Modera 1830)

c. 「パプア諸語」の現代的定義 (Ray 1893)

d. レイの探険 (Ray 1907; Schmidt 1907)

e. 宣教師の活躍

f. インド・太平洋假説 (Greenberg 1971)

2.2　日本のパプア諸語研究

(13) a. 1943 年 太平洋協會西ニューギニア探検 (泉・鈴木 1944)

b. 1963-1964 京都大学西イリアン学術探検隊 (京都大学生物誌研究会 1977)

c. 1964-1965 南山大学東ニューギニア調査団 (土田 1984; クネヒト 1998; 李 2000)

d. 吉田 (1977, 1985, 1987)、和田 (1979); Wada (1980); 和田 (1983)、Manabe and Manabe (1979, 1981)、豊田 (1987)、紙村 (1989, 2015)、Nakamura and Nakamura (2002)、Iwamoto (1992); 岩本 (2008, 2014)、Hashimoto et al. (1992); Hashimoto (1996)、Onishi (1994); 大西 (2010, 2011); Onishi (2012)

2.3　シンブー諸語

(14) a. シンブーと外部の最初の接觸: 確實なのは 1933 年の探険 (Nilles 1943: 105)

b. 1940 年代には「中央高地」の諸言語がパプア諸語=非南島諸語だと知られる (Capell 1949: 106)

c. シンブー諸語とトランス・ニューギニア (TNG) 假説 (Wurm 1975; Ross 2005; Pawley 2005)

d. シンブー語族と東西の諸言語との關係に對する疑義 (Foley 1986: 238,278)

e. 千田 (2011, 2013, 2016)

2.3.1　人稱代名詞

表 2　ドム語第一方言

	一般	非單數
1 除外	「na	「no
1 包括	–	/none
2	「en	
3	(「ye)	

表 3　ドム語第二方言

	一般	非單數
1 除外	「na	「ne
1 包括	–	/nene
2	「en	

表 4　クマン語

	單數	非單數
1 除外	na	no
1 包括	–	nono
2	ene	
3	ye	

表 5　ゴリン語

1	na
2	i

表 6　ク・ワル語 (Rumsey 1989)

	單數	雙數	複數
1	na	olto	olyo
2	nu	elti	eni
3	yu		

2.3.2　動詞平敍形語尾の人稱・數變化

表 7　ドム語第一方言

	單數	雙數	複數
1	-ke	-pke	-pge
2	-ge	-ipke	-igwe
3	-gwe		

表 8　ドム語第二方言

	單數	(任意の雙數)	非單數
1	-ke	-plke	-pge
2		-ge	
3		-gwe	

2.3.3　所有者人稱接尾辭

表 9　ドム語

	單數	非單數
1	-na, -a, -e	
2	-n, ∅	-ne
3	-m, -i, -e, ∅	

表 10　クマン語キンデコンド系方言

	單數	非單數
1	-na, -a, ∅	
2	-n, -nen, ∅	-no
3	-m, -mo, -e, -o, ∅	

表 11　ゴリン語

1 單數	-nan, -an, -e, ∅
一般	-n, ∅

3　辭書

(15)　辭書、語彙集、シソーラス ... 朝鮮語濟州方言多言語對譯シソーラスの試み (千田 2017)

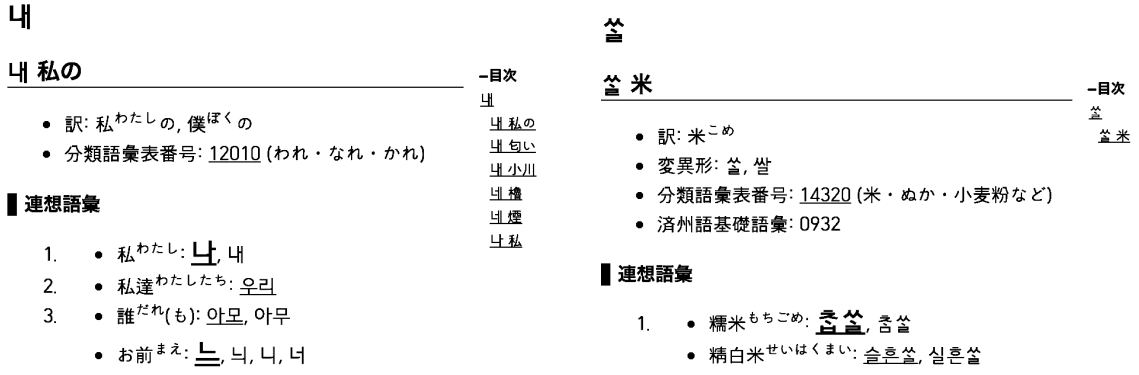

圖 1　濟州方言多言語對譯シソーラス

参考文獻

浅井恵倫 (1969) 「新村先生の追憶」,『言語研究』, 54, 12–13.

Capell, A. (1949) Distribution of languages in the Central Highlands, New Guinea (1). *Oceania* 19(2), 104–129.

Foley, William A. (1986) *The Papuan languages of New Guinea*, Cambridge University Press, xiv + 305.

後藤斉 (2016) 「エスペラントづいた柳田國男」, https://www2.sal.tohoku.ac.jp/~gothit/historio/yanagita.html,『人物でたどるエスペラント文化史』(日本エスペラント協会, 2015) に所收.

Greenberg, J. H. (1971) The Indo-Pacific hypothesis. In Sebeok, Thomas A. ed. *Current Trends in Linguistics*, 807–871. Mouton.

Hashimoto, Chiyoko, Kazuo Hashimoto, and Nozomi Kume (1992) Ata organised phonology data. SIL.

Hashimoto, Kazuo (1996) Ata - English dictionary with English - Ata finderlist. SIL.

Hyman, Larry M. (2001) Fieldwork as a state of mind. In Newman, Paul and Martha Ratliff eds. *Linguistic Fieldwork*, 15-33. Cambridge University Press.

伊波普猷 (1935) 「チエムバレン先生と琉球語」,『國語と國文學』, 12 (4), 586–601.

石川元助 (1971) 「ニューギニア原住民の話す『グナン・ツナ』語についてニューギニア研究 (1)」,『名古屋学院大学論集』, 8 (1), 33–62.

Iwamoto, Enoch (1992) Visibility and argument identification : a conceptual semantic approach to alamblak and japanese. Ph.D. dissertation, Australian National University.

岩本遠億 (2008) 「未婚女性の伝説」,『言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要』, 14, 91-–101.

——— (2014)「対照研究で読み解く日本語の世界 5 アランブラック語と日本語の授益構文」,『日本語学』, 33 (10), 86–96.

泉井久之助 (1957) 「訳者のことば」,『言語ことばの研究』. 紀伊國屋書店, エドワード・サピーア著、泉井久之助訳.

——— (1936)「金田一京助氏知里眞志保氏共著アイヌ語法概説」,『方言』, 6 (9), 689–693.

泉靖一・鈴木誠 (1944) 『西ニューギニアの民族』, 南太平洋叢書 3, 日本評論社.

紙村徹 (1989)「連載 エンガ語のすすめ - パプア諸語のなかのエンガ語 (1〜6)」,『月刊 言語』, 18 (5–10).

——— (2015)「日本におけるパプア諸語の研究史の覚書」,『Language and Linguistics in Oceania』, 7, 19–28.

菊地暁 (2011) 「ミンゾクガクシャとしての新村出、あるいは、京都で読む民俗学史」,『民博通信』, 135, 18–19.

金田一京助 (1935) 「チェインバリン先生とアイヌ語學」,『國語と國文學』, 12 (4), 579–585.

——— (1936) 「アイヌ語法概説序」,『アイヌ語法概説』. 岩波書店, 東京, 金田一京助・知里眞志保著.

——— (1969) 「嗚呼新村先生」,『言語研究』, 54, 1–2.

金城朝永 (1948) 「伊波普猷先生の生涯とその琉球學」,『民族學研究』, 13 (1), 69–78.

クネヒト・ペトロ (1998) 「南山大学による「東ニューギニア学術調査団」の行動と成果の回顧」,『アカデミア人文・社会科学編』, 67, 83–108.

京都大学生物誌研究会（編） (1977) 『ニューギニア中央高地京都大学西イリアン学術探検隊報告 1963–1964』, 朝日新聞社.

Laycock, Donald C. and C. L. Voorhoeve (1971) History of research

in Papuan languages. In Sebeok, Thomas A. ed. *Current Trends in Linguistics*, 509–540. Mouton.
李壬癸 (2000) 「南山大学所蔵・小川尚義による台湾原住民諸語資料」,『人類学研究所通信』, 8, 2–7.
リンス・ウルリッヒ (1975)『危険な言語』, 栗栖継訳, 岩波書店, 東京, (La danĝera lingvo: Esperanto en la uragano de persekutoj).
馬淵東一 (1948) 「故小川先生とインドネシア語研究」,『民族學研究』, 13 (2), 62–71.
Manabe, Kazue and Takashi Manabe (1979) A tentative phonology of Kwanga. SIL.
——— (1981) Alteration and addition of tentative phonology of Kwanga. SIL.
三ツ井崇 (2010)『朝鮮植民地支配と言語』, 明石書店, 東京, 399.
Modera, J. (1830) *Verhaal van eene reize naar en langs de zuidwestkust van Nieuw-Guinea, gedaan in 1828, door ZM Corvet Triton, en ZM Coloniale schoener de Iris.*, Vincent Loosjes.
Nakamura, Takashi and Yaeko Nakamura (2002) Aspect and mode in Maiwa discourse. SIL.
Nilles, J. (1943) Natives of the Bismarck mountains, New Guinea. *Oceania* 14(2), 104–123.
小倉進平 (1920)『國語及朝鮮語のため』, ウツボヤ書籍店, 京城, 2 + 6 + 302.
——— (1964)『増訂補注朝鮮語學史』, 刀江書院, 東京, 677 + 235, (河野六郎補注、1986 年西田書店より復刻).
Onishi, Masayuki (1994) A grammar of Motuna (Bougainville, Papua New Guinea). Ph.D. dissertation, Australian National University.
大西正幸 (2010) 「モトゥナ語における Ci/Cu 音節の短縮化」, 大西正幸・稲垣和也（編）『地球研言語記述論集 2』, 165–194. 総合地球環境学研究所・インダスプロジェクト.
——— (2011) 「ナーシオイ語民話テキスト」, 大西正幸・稲垣和也（編）『地球研言語記述論集 3』, 209–243. 総合地球環境学研究所・インダスプロジェクト.
Onishi, Masayuki (2012) *A grammar of Motuna*, Outstanding grammars from Australia 9, Lincom Europa, xxiii + 565.
Pawley, Andrew (2005) The chequered career of the Trans New Guinea hypothesis. In Pawley, Andrew, Robert Attenborough, Jack Golson, and Robin Hide eds. *Papuan pasts: cultural, linguistic and biological histories of Papuan-speaking peoples*, 67–107. Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
Ray, Sidney H. (1893) The languages of British New Guinea. *Transactions of the Ninth International Congress of Orientalists held in London 1892* II, 15–39.
——— (1907) *Reports of the Cambridge Anthropological Expedition to Torres Straits, vol III, Linguistics*, Cambridge University Press.
Ross, Malcolm (2005) Pronouns as a preliminary diagnostic for grouping Papuan languages. In Pawley, Andrew, Robert Attenborough, Jack Golson, and Robin Hide eds. *Papuan Pasts: Cultural, linguistic and biological histories of Papuan-speaking peoples*, 15-66. The Australian National University: Pacific Linguistics.
Rumsey, Alan (1989) Grammatical person and social agency in the New Guinea Highlands. *CLS* 25, 242–253.
坂野徹 (2005)『帝国日本と人類学者 一八八四—一九五二』, 勁草書房, 東京.
Schmidt, P. W. (1907) Review: *Reports of the Cambridge Anthropological Expedition to Torres Straits. Vol. III., Linguistics.* by sidney h. ray, cambridge : University press, 1907. pp. viii + 528. *Man* 7, 186–189.
新村出 (1935)「王堂先生の南島語研究」,『國語と國文學』, 12 (4), 553–558.
——— (1938)「上田先生を偲ぶ」,『『方言 8(2)』』, 8 (2), 198–202, 上田萬年博士追悼記念號竝終刊號.
——— (1943)「序文」,『言語 – ことばの研究序説』. 刀江書院, 東京, エドワード・サピア著、木坂千秋譯.
——— (1972)「ドレスデン大会の思い出」,『新村出全集第十四巻』, 330–335. 筑摩書房, 東京.
千田俊太郎 (2011)「東シンブー諸語サブグルーピングに向けて」, 大西正幸・稲垣和也（編）『地球研言語記述論集』, 3, 153–182. 言語記述研究会・総合地球環境学研究所インダスプロジェクト.
——— (2013)「ドム語第二ドム方言」,『ありあけ熊本大学言語学論集』, 12, 1–30.
——— (2016)「東シンブー諸語の所有者人稱接尾辭について」,『ありあけ熊本大学言語学論集』, 15, 1–40.
——— (2017)「ウェブと語彙集 : 朝鮮語濟州方言語彙研究の課題と展望」,『ありあけ熊本大学言語学論集』, 16, 35–46.
豊田由貴夫 (1987)「音韻分析のためのコンピュータ・プログラム : ニューギニア, セピック地域の一言語を分析例として」,『文化人類学』, 52 (1), 70–81.
土田滋 (1984)「浅井　恵倫」,『社会人類学年報』, 10, 1–28, (監修: 馬淵東一・鈴木二郎).
——— (2015)「ツォウ語、カナカナブ語、サアロア語その言語学的位置・下位分類の変遷」,『民族學界』, 36, 5–28.
Voorhoeve, C.L. (1975) A hundred years of Papuan linguistic research: Western New Guinea area. In Wurm, S.A. ed. *New Guinea area languages and language study, Vol. 1, Papuan languages and the New Guinea linguistic scene*, PL C-38, 117-144. The Australian National University: Pacific Linguistics.
和田祐一 (1979)「ガレラ語における方向指示の接辞形式」,『言語研究』, 75, 103–106, (大会研究発表要旨).
Wada, Yuiti (1980) Correspondence of consonants in North Halmahera languages and the conservation of archaic sounds in Galela. In Ishige, N. ed. *The Galela of Halmahera*, 497–529. National Museum of Ethnology.
和田祐一 (1983)「北ハルマヘラ諸語の子音對應とガレラ語の示す古音」,『国立民族学博物館研究報告』, 7 (3), 423–471.
Wurm, S.A. (1975) Eastern Central Trans-New Guinea phylum languages. In WURM, S.A. ed. *New Guinea area languages and language study, Vol. 1, Papuan languages and the New Guinea linguistic scene*, PL C-38, 461-526. The Australian National University: Pacific Linguistics.
吉田集而 (1977)「ハルマヘラ島における民俗方位の構造」,『国立民族学博物館研究報告』, 2 (3), 437—497.
——— (1985)「パプアニューギニア、イワム族の農耕に関する民俗分類の予備的報告」,『国立民族学博物館研究報告』, 10 (3), 615–680.
——— (1987)「イワム語の助数詞」,『民博通信』, 36, 44–45.